Possibility of Mere Exposure Effect Exhibited in a Daily Life: Discussion Using Colored Judo Uniform

OSADA Miho^{a,*}, KOBAYASHI Shigeo^b

^a*Nippon Engineering College, Nishikamata, Ota-ku, Tokyo 144-8655, Japan*

^b*Kyoritu Women's University, Hitotsubashi, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8437, Japan*

Received 12 August 2005; accepted for publication 24 April 2006

Abstract

Our previous four papers are based on the change in exposure frequencies by an experimental method. On the other hand, this study is concerned with a possibility of the mere exposure effect exhibited in a daily life situation. After a blue judo uniform was approved by International Judo Federation (IJF) in October, 1997, we studied whether the mere exposure effect appears in case of a blue judo uniform among judo team students in three universities who have more exposure of judo uniform. Also we studied a change in preference for the colored judo uniform among non-judo team students in a university and a college who have less exposure of judo uniform, before and after the Sydney Olympic.

Among judo team students, preference for women's blue judo uniform is increased with the passage of time, this is the mere exposure effect, while a great change in preference for a blue judo uniform was not seen among non-judo team students.

Key Words: Mere exposure effect, Daily life situation

単純接触効果が日常生活に現れる可能性 ～カラー柔道着を用いた検討

長田美穂^{a,*}, 小林茂雄^b

1. 緒言

1997年10月に国際柔道連盟 (IJF) において青のカラー柔道着が認定され使用され始めてから、オリンピックが2度も開催された。柔道着は白以外見たことがなかったため、初めて青の柔道着を見たときは違和感を覚えた人たちが多かったといわれている。しかし何度か見慣れるうちに、青の柔道着は、一般にも受け入れられてきたようである。本論文は、カラー柔道着の印象の変遷を1997年秋に青の柔道着が認定されたのを受けて、普段柔道着を目にする機会の多い柔道部に所属する男女大学生を対象に、カラー柔道着認定の直後から4年にわたり、印象の変化をアンケート調査した結果をまとめたものである。その目的は、カラー柔道着（青）において、年月を重ね目にする頻度が増すことによって、「見慣れない対象であっても繰り返しの接触により、心地よい対象となり、好感度が増す」という Zajonc[1]が名付けた単純接触効果が出

現する可能性があるかどうかを検討することであった。また普段柔道に関わりの薄い一般男女学生に対しても、カラー柔道着がテレビで大々的に放映された2000年8月開催のシドニーオリンピック前後にカラー柔道着の印象についてアンケート調査を実施し、青の柔道着に好感度の変化が見られるかどうかを検討した。

単純接触効果については、筆者らは先に第1～第4研究の4つの研究[2-5]を行い、衣服に対しても単純接触効果が出現することを見いだした。さらに第5研究である「カラー柔道着における単純接触効果～衣服の色彩の側面からの単純接触効果への接近」[6]の研究では衣服の色彩という側面から接近した結果、刺激対象が女子柔道着の女子被験者に単純接触効果が出現する結果となった。本論文は、同じく衣服の色彩に対する側面から単純接触効果を論じたものではあるが、今までの研究との違いは、実験的操作を加えていない、という点が挙げられる。すなわち、この研究ではカラー柔道着（青）

* 連絡先：日本工学院専門学校 144-8655 東京都大田区西蒲田5-23-22, E-mail: qqb577e9k@cello.ocn.ne.jp

の印象の変化を題材にして、自然な日常場面において果たして単純接触効果が出現する可能性があるのかどうかを検討する。実験的手法に比べ、様々な要因が混入する可能性はあるものの、年月の経過による好感度の変化の中に単純接触効果に関与していないとは言い切れないであろう。また実験的手法による単純接触効果の研究でも、実験で操作している対象をより意識しない状況の方が、効果が出現しやすい傾向にある。そこでカラー柔道着を対象に、色という側面から印象の変遷を調査する中で、自然な形の単純接触効果の出現があるかどうかを検討する。

2. 調査1 柔道部員におけるカラー柔道着への印象の変化について

2.1 方法

2.1.1 刺激写真

白、青、赤、桃、紫、黄、橙、緑、黒の9色のカラー柔道着写真を作成し、A4版の写真用光沢紙に縦26.5 cm×横13.5 cmの大きさにプリントアウトしたものを使用した。実験ではなく、自然状況下で単純接触効果が出現する可能性があるかどうかを青の柔道着で見ていくが、従来の白を含め、残り8色の柔道着は、新色な色の柔道着を何度も目にするうちに好感を抱くようになるかどうかを検討する、という調査の意図を隠すためのダミー写真として用いた。刺激写真は男子柔道着写真、女子柔道着写真の2パターンである (Fig. 1)。

Fig. 1 Men's and women's judo uniform.

Table 1 Twelve rating scales measuring impressions of judo uniform.

Scale No.	Rating scale
1	gay(派手な)-plain(地味な)
2	casual(カジュアルな)-formal(フォーマルな)
3	agreeable(感じのよい)-disagreeable(感じのわるい)
4	commonplace(ありふれた)-novel(珍しい)
5	modern(モダンな)-classic(クラシックな)
6	friendly(親しみやすい)-unfriendly(親しみにくい)
7	likable(好きな)-dislikable(嫌いな)
8	mature(大人っぽい)-childish(子供っぽい)
9	manly(男っぽい)-womanly(女っぽい)
10	progressive(進歩的な)-conservative(保守的な)
11	sporty(スポーティな)-dressy(ドレッシーな)
12	conspicuous(人目をひく)-quiet(人目をひかない)

2.1.2 被験者

18～22歳の3大学の柔道部に所属する男女大学生を対象とした。実施期間は4年間、4回にわたり、1回目(1997年12月～1998年2月)は男子柔道着に対して男子被験者53名、女子被験者25名であり、女子柔道着に対して男子被験者27名、女子被験者28名。2回目(1999年1月～2月)は男子柔道着に対して男子被験者89名、女子被験者23名であり、女子柔道着に対して男子被験者14名、女子被験者23名。3回目(2000年1月～2月)は男子柔道着に対して男子被験者79名、女子被験者18名であり、女子柔道着に対して男子被験者64名、女子被験者32名。4回目(2001年1月～2月)は男子柔道着に対して男子被験者58名、女子被験者16名であり、女子柔道着に対して男子被験者25名、女子被験者33名であった。なお、各回の被験者はいずれも異なり互いに独立である。

2.1.3 手続き

アンケート用紙は大学ごとに柔道部宛に郵送で送付し、回収した。9色の色の柔道着をランダムに呈示してもらい、それぞれの色から受ける柔道着の印象をTable 1に示す12の形容詞対で、7点のSD尺度上に評定を求めた。また、アンケート回答場所は、体育館を中心とした柔道の練習場であり、集合調査法により回答してもらった。

2.2 結果

印象評定の結果は、7点尺度の各評定に1点～7点を付与して整理された。まず、用いた12の形容語対のうち、好感度を測定している尺度を確定するために、4年間、4回分のすべてのデータをもとに因子分析した。Table 2が固有値1.0以上、バリマックス回転後の因子負荷量を示したものである。これら因子のうち第1因子が評価性因子であり、その中から好感度項目を測定するために3尺度を用いた。すなわち、尺度3「感じのよい-感じのわるい」、尺度6「親しみやすい-親しみにくい」、尺度7「好きな-嫌いな」が該当する。今回の結果の、第1因子の中には第1研究から第4研究までには評価性因子にはあらわれない尺度4「ありふれた-珍しい」、

Table 2 Factor analysis of impression ratings (In case of judo team students).

Scale No.	Factor 1	Factor 2	Factor 3	h^{2*}
1	-0.3136	-0.7234	0.5458	0.9196
2	0.1672	0.8074	-0.4159	0.8528
3	0.8821	0.4344	-0.0422	0.9686
4	-0.8472	-0.3522	0.2130	0.8872
5	0.1117	0.7500	-0.2202	0.6235
6	0.8500	0.4799	-0.1156	0.9611
7	0.8147	0.5159	-0.0909	1.5586
8	-0.1859	-0.3236	0.7929	1.0668
9	-0.1103	-0.1712	0.9631	0.0415
10	0.3849	0.7213	-0.0012	0.6684
11	-0.8424	0.1612	0.2571	0.8017
12	-0.4485	-0.7624	0.3252	0.8882
Contribution(%)	34.4	31.7	19.3	
h^{2*} is communality				

尺度11「スポーティな-ドレッシィな」もあらわれた。また、この結果は先に筆者らが行ったカラー柔道着を対象とした第5研究[6]の実験でも尺度11だけは評価性因子にあらわれた。この理由としては、前述の先行研究[2-5]（第1研究から第4研究）の刺激対象であった婦人服では、好感度項目に関する因子、カジュアル感の因子、目立ちの因子の3軸からなっていたが、柔道部員における柔道着は、目立ちの因子に入っていた「ありふれた」（尺度4）と、カジュアル感の因子にあった「スポーティな」（尺度11）が、好感度因子に吸収された。尺度4に関しては、長期にわたっての調査のため、初めは新奇であったカラー柔道着が、見慣れることによりありふれたものとなり、その結果として好感度の上昇と結びついたと考えることができる。したがって、尺度4が好感度因子に吸収されたといっても、単純接触効果の出現の可能性によって、見慣れることと好感度の上昇ということが表面的に関連をもったことにすぎないと考えられる。このことから、本研究ではまず尺度4を好感度尺度からはずすことにした。また尺度11は、同じく柔道着を使った第5研究[6]においても好感度因子として位置づけられていたが、好感度因子からはずした経緯がある。柔道着は普通の衣服とは違い、スポーティであることが好感度を高める要因となるようであるが、この点については今後の研究課題としたい。本研究においては、通常の衣服を刺激対象とした先行研究と整合させるため、好感度項目として尺度11をもはずすことにした。

次にTable 3において、実際に実験で用いた9色のカラー柔道着のプリントアウトした柔道着部分を、測色色差計（日本電色株式会社製、測色色差計ZE-2000）で3箇所測定した平均値をCIEL*a*b*値で示す。

また、カラー柔道着が1～4年目のアンケート回答者であった柔道部員にとってどのくらい新奇なものであったのかを、尺度4の「珍しい-ありふれた」の評定の平均と標準偏差で検討した。中立点4.00と考えて、平均の値が大きいほど、カラー柔道着が新奇なものと受けとめられていることを示すことになる（非常に珍しいは7）。1～4年目の新奇性を男女柔道着別で検討してみると、青の男子柔道着においては、被験者は全体的に2年目、3年目と新奇性が低く、4年目のオリ

Table 3 CIELAB values of judo uniform colors used in this study.

Color	L*	a*	b*
White	40.1	-0.1	-3.5
Blue	30.9	0.6	-12.6
Red	32.2	15.2	4.3
Pink	31.2	21.2	2.7
Purple	30.0	8.4	-16.2
Yellow	41.6	-1.1	25.9
Orange	35.3	13.4	17.0
Green	27.9	-9.7	5.5
Black	24.2	-1.2	1.2

Table 4 Means of favorability impression ratings under four years in case of men's blue judo uniform.

Scales	Sex of subject	1st year	2nd year	3rd year	4th year
3	Male	4.38 (1.29)	3.72 (1.67)	4.38 (1.40)	4.57 (1.35)
	Female	3.72 (1.28)	2.87 (1.60)	3.94 (1.47)	4.38 (2.06)
6	Male	3.79 (1.65)	3.72 (1.66)	4.24 (1.49)	4.67 (1.56)
	Female	3.72 (1.62)	3.35 (1.43)	4.67 (1.57)	4.81 (1.76)
7	Male	3.98 (1.12)	3.84 (1.52)	4.08 (1.33)	4.59 (1.43)
	Female	3.60 (1.66)	2.83 (1.34)	4.11 (1.81)	4.56 (1.63)
Total	Male	12.15 (2.92)	11.28 (4.11)	12.70 (3.39)	13.83 (3.61)
	Female	11.04 (3.78)	9.04 (3.88)	12.72 (3.68)	13.75 (4.91)

Values in parentheses indicate standard deviations.

Table 5 Means of favorability impression ratings under four years in case of women's blue judo uniform.

Scales	Sex of subject	1st year	2nd year	3rd year	4th year
3	Male	3.33 (1.47)	4.43 (1.40)	4.14 (1.33)	4.88 (1.05)
	Female	3.25 (1.40)	3.22 (1.65)	4.75 (1.55)	4.55 (1.37)
6	Male	3.81 (1.47)	4.57 (1.16)	4.31 (1.41)	5.20 (1.00)
	Female	3.43 (1.64)	3.13 (1.79)	4.78 (1.81)	5.30 (1.19)
7	Male	3.89 (1.12)	4.57 (0.85)	4.17 (1.52)	4.84 (1.14)
	Female	3.43 (1.55)	3.35 (1.75)	4.75 (1.85)	5.24 (1.17)
Total	Male	11.04 (3.65)	13.57 (3.03)	12.63 (3.68)	14.92 (2.38)
	Female	10.11 (4.20)	9.70 (4.77)	14.28 (4.83)	15.09 (3.11)

Values in parentheses indicate standard deviations.

ピック（以下、すべてシドニーオリンピックを指す）終了後にまた新奇性が上がってきており、男女被験者ともに3年目が最も新奇性が低く、オリンピック後の4年目にまた上昇した結果となった。また女子柔道着の被験者に関しては、特に女子被験者にとっては青の柔道着は、年数とともに新奇性が下がってきている傾向にあるのが特徴的であった。

次に、青の柔道着に単純接触効果と呼べる現象が出現したかどうかを以下に示す。Table 4が男子柔道着の、4年間の好感度に関連した評価項目の平均値を示した結果であり、Table 5は女子柔道着の結果である。また好感度（尺度3、6、7、及び3尺度の合計値）に関する2元配置（A：年月経過、B：被験者の男女差）の分散分析をした結果、男子柔道着においては、4年間の年月経過の主効果（主効果A）において、すべての好感度項目で、有意差が認められた（尺度3：

$F(3,353)=6.82$, $p<0.01$; 尺度6: $F(3,353)=7.87$, $p<0.01$; 尺度7: $F(3,353)=7.93$, $p<0.01$; 3尺度の合計値: $F(3,353)=10.66$, $p<0.01$). さらに多重比較(テューキーのHSD検定)によってどの年とどの年の間に有意差が認められるのかを検討し, 年月の経過による好感度の上昇があるのかどうかを確認した. 2年目が最も好感度が低いため, すべての尺度において2年目と4年目の間に1%水準で有意差が認められた. 尺度3「感じのよさ」は, 1年目と2年目の間に5%水準で, 1年目と3年目の間, 2年目と3年目の間に1%水準で有意差が認められた. 尺度6「親しみやすさ」, 「3尺度合計」(感じのよさ, 親しみやすさ, 好きの3尺度の合計)では1年目と4年目の間, 2年目と3年目の間に1%水準で有意差が認められた. また尺度7「好き」では1年目と4年目の間, さらに2年目と3年目の間に5%水準で有意差が認められた. また, 被験者の性別の主効果(主効果B)においては「感じのよさ」だけで, 有意差が認められた(尺度3: $F(1,353)=7.79$, $p<0.01$). 男子被験者が3年目には女子被験者よりも全体的に好感度項目が低くなるものの, 1, 3, 4年目は男子被験者の方が女子被験者より好感度項目が高い結果となった. 男子柔道着においては, 男子被験者は女子被験者に比べ, 最初から好感度項目が高かったのに対し, 女子は1, 2年目に比べ, 3, 4年目にかけて好感度項目が高くなる結果となり, 年月とともに好感度が上昇する単純接触効果の影響が認められる結果となった.

女子柔道着の結果は, 年月经過の主効果(主効果A)で, 3つの好感度項目全てに有意差が認められた(尺度3: $F(3,292)=5.77$, $p<0.01$; 尺度6: $F(3,292)=7.04$, $p<0.01$; 尺度7: $F(3,292)=5.02$, $p<0.01$). 同様に多重比較(テューキーのHSD検定)をし, どの年とどの年の間に有意差が認められるのかを検討し, 好感度の上昇が見られるのか確認した. 3尺度とも, 1年目と4年目の間に1%水準で有意差があった. さらに「感じのよさ」では2年目と3年目の間において, 5%水準の有意差が認められた. また2年目と4年目の間に「親しみやすさ」において1%水準で有意差が認められ, 「好き」では5%水準で有意差が認められた. 2年目で女子被験者の好感度項目の評価が男子被験者より低かったのが3年目に逆転, 4年目は男子被験者とほぼ並ぶ評価となった. 女子被験者においては, 1年目から2年目にかけて評価が落ち込んだものの3年目, 4年目と月日が経つにつれて好感度が増す現象が見られた. しかしながら被験者の性別の主効果(主効果B)に有意差がなく, 被験者の男女による差は認められなかった.

柔道部員の間では, 青の女子柔道着に対して1, 2年目に低かった好感度項目が, 年月とともに高くなり, 単純接触効果の影響も一因として考えられる現象が生じていることがわかった.

3. 調査2 一般学生におけるカラー柔道着への印象の変化について

3.1 方法

3.1.1 刺激写真

白, 青, 赤, 桃, 紫, 黄, 橙, 緑, 黒の9色のカラー柔道着をコンピュータの画面に映し出し, それを評定してもらった.

13.3型のコンピュータ画面に映し出された画像の大きさは, 縦16.2 cm × 横7.7 cmであった. 刺激写真は先の柔道部でのアンケート調査で使ったものと同様の男子柔道着写真, 女子柔道着写真の2パターンである (Fig. 1).

3.1.2 被験者

18~26歳までの男女専門学校生, 女子大学生, 大学院生を対象とした. オリンピック前は男子柔道着に対して男子被験者30名, 女子被験者30名の合計60名であり, 女子柔道着に対して男子被験者30名, 女子被験者30名の合計60名. オリンピック後においては, 男子柔道着に対して男子被験者29名, 女子被験者27名の合計56名であり, 女子柔道着に対して男子被験者28名, 女子被験者28名の合計56名であった. 実施期間は, オリンピック前が2000年6月~7月であり, オリンピック後は2000年10月~12月であった. なお, オリンピック前と後の被験者は互いに独立である.

3.1.3 手続き

調査は北窓自然光の環境で, 個別に行った. 被験者はコンピュータの正面から30 cm程度離れて座り, コンピュータの画面を見ながら実施した. まず被験者に白, 青, 赤, 桃, 紫, 黄, 橙, 緑, 黒の9色で塗られたカラー柔道着の画面を通覧させた上で, 順に1枚ずつ呈示し, それぞれの色から受ける印象をTable 1に示す12形容詞を使い7点尺度上のいずれに当てはまるかを評定してもらった.

3.2 結果

Table 6が因子分析の結果であり, 固有値1.0以上, バリマックス回転後の因子負荷量を示したものである. これら因子のうち第2因子が評価性因子であり, その中から好感度項目を測定するために3尺度を用いた. すなわち, 尺度3「感じのよい-感じのわるい」, 尺度6「親しみやすい-親しみにくい」, 尺度7「好きな-嫌いな」が該当する. この結果は柔道部員に対して行った調査1でも評価性因子にあらわれた尺

Table 6 Factor analysis of impression ratings (In case of non-judo team students).

Scale No.	Factor 1	Factor 2	h^{2*}
1	-0.9212	0.2702	0.9216
2	0.9615	-0.1277	0.9408
3	0.4255	-0.8913	0.9755
4	-0.5857	0.7412	0.8924
5	0.8280	-0.3776	0.8282
6	0.5182	-0.8468	0.9856
7	0.4839	-0.7912	0.8602
8	-0.8320	0.2000	0.7322
9	-0.7404	0.3529	0.6727
10	0.7798	-0.4448	0.8059
11	0.0227	0.8305	0.6902
12	-0.8753	0.4070	0.9318
Contribution(%)	50.8	34.5	

h^{2*} is communality.

度4「ありふれた-珍しい」、尺度11「スポーティな-ドレスシィな」も同じく第2因子にあらわれた。一般学生にとっての柔道着は先行研究の婦人服に比べてデザインもパターン化され単純なため、3軸から2軸に吸収されたと考えられる。本研究においては、先行研究ならびに調査1と整合させるため、好感度項目としては尺度4、尺度11をはずした。

また用いた柔道着が色によってどのくらい新奇であったのかを、尺度4「ありふれた-珍しい」により検討した。オリンピック前後の青の男子柔道着（男子被験者：4.43 (1.52) → 3.93 (1.36)、女子被験者：5.20 (1.40) → 4.23 (1.38)；（ ）内は標準偏差）に対する女子被験者の t 値は5%水準で有意であり、同じく青の女子柔道着（男子被験者：4.43 (1.65) → 4.43 (1.57)、女子被験者：5.70 (1.21) → 4.00 (1.19)；（ ）内は標準偏差）の女子被験者においても1%水準で有意と認められ、オリンピックを通して青の柔道着の新奇性が下がったことがわかる結果を得た。

次にTable 7において、実際に実験で用いた9色のカラー柔道着を、調査1と異なりコンピュータ画面を見ながら実験したため、分光放射輝度計（株式会社トプコン製、TOPCON 色彩輝度計BM-7）で測定したCIE_{xyY}値で示した。

オリンピック観戦により好感度の変化を見ようとした結果は、Table 8に示す。これは青の柔道着に対する好感度（尺度3、6、7、及び3尺度の合計値）に関する評価項目の平均値をオリンピック前後に分けて示した結果である。この結果をも

とに2元配置（A：オリンピック前後、B：被験者の男女差）の分散分析をした結果、男子柔道着、女子柔道着ともにオリンピック前後による主効果（主効果A）、被験者の性別による主効果（主効果B）に有意差が認められなかった。オリンピックの前後に関連する交互作用では、女子柔道着において、被験者の性別とオリンピック前後の交互作用においての「感じのよさ」で有意差が認められた（ $F(1,112) = 4.41, p < 0.05$ ）。オリンピック前には男子被験者の方が好感度項目の評価が高く、オリンピック後には男子被験者の評価が下がり、女子被験者の評価が上がった。オリンピック後に女子被験者は男子被験者の好感度項目の評価を上回る傾向が、女子柔道着の被験者に顕著にあらわれた。

4. 総合的考察

本研究では、青のカラー柔道着の印象の変化を調査しながら、単純接触効果が自然な日常場面に果たして出現する可能性があるのかも検討することを目的として行われた。調査1においては、普段柔道着に接する機会の多い男女柔道部員に対して、国際柔道連盟に青の柔道着が認定された直後から4年間、アンケートを実施した。結果は、男女柔道着においては、青の女子柔道着において年月経過とともに好感度が増す単純接触効果ともいえるべき現象が出現していた。これには柔道に対する「柔道着は白である」という見方が1、2年目から3、4年目にかけて減少したことでもあるわけだが、男子被験者が「自分が実際に着るのはどうかと思う」という意見が多かったのに対し、女子被験者は「着てみたい」という積極的な意見が目立ったことに関係するであろう。男子被験者は、他の人が着るぶんにはまだ許容できても、自分で実際に着用する段階になるとまだ否定的であるが、女子被験者では柔道のイメージ自体も明るくなるという意見が目立ち、実際に着用するのに抵抗がない傾向にあったようである。

さらに調査2においては、柔道に普段馴染みの薄い、男女一般学生に対してもオリンピック前後にカラー柔道着につい

Table 7 CIE_{xyY} values of judo uniform colors used in this study.

Color	x	y	Y
White	0.3	0.3	25.8
Blue	0.2	0.1	5.2
Red	0.6	0.3	10.7
Pink	0.5	0.3	16.2
Purple	0.2	0.2	7.3
Yellow	0.5	0.4	31.7
Orange	0.6	0.3	18.5
Green	0.3	0.3	0.3
Black	0.4	0.2	1.1

Table 8 Means of favorability impression ratings under before and after Olympic in case of men's and women's blue judo uniform.

Scales	Sex of subject	Men's judo uniform		Women's judo uniform	
		Before Olympic	After Olympic	Before Olympic	After Olympic
3	Male	3.93 (2.03)	3.90 (2.01)	4.24 (2.00)	4.25 (1.93)
	Female	3.82 (1.94)	4.09 (1.79)	3.72 (1.82)	4.39 (1.63)
6	Male	3.76 (2.06)	3.86 (2.06)	4.12 (2.10)	3.82 (2.00)
	Female	3.63 (1.98)	3.80 (1.98)	3.73 (1.91)	3.96 (1.89)
7	Male	4.00 (1.94)	3.93 (1.96)	4.31 (1.93)	3.91 (1.93)
	Female	3.80 (1.81)	3.91 (1.84)	3.74 (1.77)	4.17 (1.70)
Total	Male	11.69 (5.25)	11.69 (5.64)	12.66 (5.15)	11.69 (5.47)
	Female	11.25 (5.23)	11.79 (5.12)	11.19 (5.15)	12.52 (4.76)

Values in parentheses indicate standard deviations.

でのアンケートを実施した。こちらは自分が実際に柔道着を着用するという考えが根底にない場合であると言ってよいであろう。男女被験者に有意差はなく、青の柔道着に好感度の上昇は見られなかった。念のためオリンピック前にカラー柔道着（青）を一度も目にすることがなく、オリンピックを通してカラー柔道着を見た学生のみでも検定を行ったが、同様の結果を得た。このことは柔道部員と比べて、柔道着の色にこだわりのないことを示したとも考えられる。

以上のことから、実際に自分が着用する可能性があるかどうかによって衣服の好感度の変化には違いがあるといえる結果となった。また、衣服における単純接触効果の出現においても、実際に着用するかどうかで違いがある可能性が大きいといえる結果となった。さらに、一般男子学生では、着用する可能性が低いにもかかわらず男子柔道部員同様に、カラー柔道着の好感度の上昇が見られず、ひいては単純接触効果が出現しなかった可能性が高いことから、柔道着への関心が柔道部員より低いことも関係しているものと考えられる。自分が着用する可能性があるもの、関心の高い衣服対象に関しては、女子被験者の方に効果が出現しやすいといえる結果となった。

5. 結 言

本研究は従来の研究とは異なり、衣服に対する好感度が、あまり対象を意識させない日常の自然状況ではどのように変化するか見てみようとするものであった。刺激対象としてはカラー柔道着を用い、普段柔道着に接する機会の多い18～22歳の男女柔道部員と、柔道着には馴染みの薄い18～26歳の男女一般学生を対象として調査を行った。

柔道部員においては、国際柔道連盟 (IJF) において青の柔道着が認定された1997年10月直後からの4年間にわたり、3大学の柔道部に所属する男女大学生にアンケートを実施した。結果は青の女子柔道着に、年月の経過とともに好感度が上昇するという単純接触効果も一因と考えられる現象があらわれていた。これには、男子が青の柔道着を自分が実際に着用することに、年月が経ってもなお抵抗があるものの、他の人が着ていることに対しては年月とともに許容できるようになったのに対し、女子は年月とともに好感度も増し、自分も実際に着用したい、してもよい、という考えになったことによる

だろう。この考え方の違いは、男子より女子に新しい衣服に対する積極性がよりあること、つまりは流行の採用の積極性が女子に強いこととも関連している可能性が考えられる。

さらに青の柔道着がテレビで大々的に放映された2000年8月開催のオリンピック前後に、普段柔道着に馴染みの薄い男女一般学生を対象に、カラー柔道着における印象の違いをアンケート調査した。結果は、青の柔道着に対して、好感度項目の評価の上昇は見られなかった。

本研究の結果を総合的に考察すると、実際に着用する意識の薄い柔道着を対象とした場合、見慣れて好感度が上昇したとしても、そこから先の実際に自分で着用する、という柔道部員には切実な段階になると女子の方が積極的な傾向にあるようである。このことは、実験的手法を用いた単純接触効果の色彩からの接近について考察した第5研究[6]と併せて、流行の採用において男子よりも女子の方がより積極的であることが関連している可能性が考えられる。

謝 辞

4年間にわたりアンケート調査に快くご協力いただきました、日本体育大学柔道部の山本洋祐先生、筑波大学柔道部の小俣幸嗣先生、国士舘大学柔道部の森脇保彦先生、また財団法人全日本柔道連盟の米重清光さんに心より感謝致します。

References

- [1] Zajonc RB (1968) Journal of Personality and Social Psychology Monograph Supplement, **9**, 1–27
- [2] Osada M, Sugiyama M, Kobayashi S (1992) J Text Mach Soc Japan, **45**, T193–T198
- [3] Osada M, Kobayashi S (1995) J Text Mach Soc Japan, **48**, T87–T94
- [4] Osada M, Kobayashi S (1996) J Text Mach Soc Japan, **49**, T183–T188
- [5] Osada M, Kobayashi S (2005) Japanese J of Sensory Evaluation, **9**, 40–46
- [6] Osada M, Kobayashi S (2005) J Text Mach Soc Japan, **58**, T48–T54